第八回幻想異端文学大賞第一部門【ロリータ】応募作品

ロリコップ

ザッピー浅野

プロローグ

木の実は学校に笛を忘れた。

三年生の時から使っている、茶色とベージュの縦笛だ。今日音楽の授業が終わった後、メロンの刺繍を縫いこんだ袋につつんで机に入れたまま、忘れてきてしまったのだ。

木の実は音楽の授業が嫌いだった。歌もヘタだし、楽器を弾くのも苦手だし、先生の話す音楽家の話しも退屈でしょうがない。笛の袋に大好きなメロンの刺繍を縫いこんだのも、苦痛な時間を少しでも楽しく感じることができるためのおまじないのようなものだった。

今日学校に笛を忘れてしまったのも、笛のテストの課題曲だった「牛ちゃんマンボ」がうまくふけなかったことを早く忘れてしまいたかったあまりのおつりにちがいない。

下校途中、笛を学校に忘れてきたことに気がついた木の実は、急いで学校に引きかえしてきたのだ。

笛くらい学校に置いておけばいいとも思ったが、数カ月前クラスの担任の芳井先生が誰もいなくなった放課後に女の子の笛をこっそり机から取り出してペロペロ舐めているのが美佐子ちゃんの目撃証言で発覚して以来、みんな必ず笛は毎回家に持って帰るようになったのだ。

芳井先生は今年の四月からこの成城(せいじょう)南小学校に赴任してきた新任の先生である。始業式の朝礼で木の実は初めて芳井先生をひと目見て、生理的な嫌悪感をおぼえた。

油で光ったぼさぼさの髪の毛に、しゃれこうべのように痩せた顔、理科の授業で使った凸レンズのような分厚い丸メガネからは、ただでさえ落ちくぼんだグロテスクな眼球が拡大されてのぞいている。だらしなく開きっぱなしの薄い唇からはガラスを引っかいたときのようなカン高い声がとどろき、曲がったネクタイ、ヨレヨレの背広は汚らしくしめっているのか、あの日は春一番が吹いていたにもかかわらず、風になびかなかった。

木の実はどうしてあんなキタナイおじさんが先生になれたのか解らない。

始業式が終わり、新しいクラスが発表され、芳井が自分の担任になったと知った時、木の実はこれからの一年間が暗く憂鬱なものに変わってゆくのを感じたものだった。

木の実の通う成城南小学校は一学年に十クラス以上もあるちょっとしたマンモス校である。生徒の数も多ければ、先生の数も覚えきれないほど多い。その中でよりによってあの芳井が自分のクラスの担任になるなんて、運が悪いとしか思えなかった。

聞けば、彼は今年の三月にある事件がきっかけで死んでしまった、美奈子先生の代わりだという。そして美奈子先生は三年生のときの木の実の担任だったのだ。

四年生になり新しい芳井が担任になったのは、その流れが関係しているのかもしれない。

美奈子先生から芳井先生になったなんて、まるで天国から地獄におちたようだ。

美奈子先生が担任だった三年生の頃が、いままでで一番楽しかった。

教室はいつも明るかったし、先生の授業を思うと朝起きるのもつらくなかった。

それがあんな形で、最悪の終焉をむかえるとは。

木の実はあの恐ろしい事件のことを考える。

あの事件で、美奈子先生やたくさんのクラスメートたちが死んでしまった。

今思い出しても、まるで悪い夢でも見ていたかのような恐ろしい出来事だった。

事件の起きる少し前から、美奈子先生の様子がおかしかったのを思い出す。

何かに脅えているというか、まるで目に見えない恐怖に踊らされているような目つきで時おり何もない壁や廊下の向こうをキョロキョロ見渡し、落ち着きがなかった。きっと美奈子先生は近い将来、学校に何かが起きることを予期していたのかもしれない。

そしてある日、惨劇は起こった。

それは国語の授業が終わったすぐ後のことだった。

それまで平和だった学校は、突如として惨劇の館と化した。

血まみれの廊下。
血まみれの教室。
血まみれの先生と生徒たち。
殺戮は伝染病のように学校中に拡散し、あたりは逃げまどうみんなの悲鳴と逃げ遅れた犠牲者の血飛沫で、毎日見なれた学校の光景が別世界のように豹変した。
学校がにわかに騒ぎだし、異変に気がついたとき、木の実は何が起こったのかわからず戸惑うばかりだった。
いや、今こうして思い出しても、何が起こったのかはっきりとしない。
以前テレビのニュースで気が狂った殺人犯が小学校に乱入し、罪のない小学生たちを十何人も殺した事件が報道されていたが、それと同じような事件がこの学校にも起こったのかと思った。
しかし、ちょっと違うようだった。
まず、誰がみんなを血まみれにしているのか解らない。
今でもそれは謎のままなのだ。
ある者は頭が半分なくなり、ある者は手や足が引っこ抜かれ、ある者は内臓が引きずり出されていた。
その切り口はナイフのような刃物で切り裂かれたというよりも、何か動物のような生き物に食い荒らされたという印象だった。
次々とみんなが死んでいくのに、みんなを殺している犯人が目に見えない。
その中で、唯一美奈子先生だけが、何かを知っているようだった。
美奈子先生は血だらけになりながらも、的確に生き残っているみんなを誘導し、逃がしていた。
そして最後の犠牲者となった美奈子先生の死とともに、事件は幕を閉じた。
後は朱に染まり、昔絵本で見た恐ろしい地獄のような風景だけが残された。
木の実は思う。美奈子先生は自分の命と引き換えに、残りのみんなの命を守ったのだと。
仲が良かった理華ちゃんも、体育の浜田先生も、人気者だった綾子ちゃんも、留学生のアリッサちゃんも、みんな死んでしまった。でも自分は生きている。まだたくさんのみんなが生きている。
大好きだった美奈子先生のためにも、命は大切にしなくちゃいけない。

そう、あの芳井先生だって生きている。ちょっと気持ち悪いけど、彼だって人間なのだ。まだ知り合って数カ月なのに、見た目やちょっとしたイタズラで判断するのはいけないことなのかもしれない。木の実はそう思い直す。

そろそろ太陽が地面に近づき、あたりは薄暗くなりかけている。急がないとママが心配する。

そういえば朝牛乳を飲んだ時、冷蔵庫に大きくておいしそうなメロンが入っていた。早く帰らないとおやつの時間も過ぎてしまう。

木の実は見えてきた学校に向かって走り出した。

つい三十分ほど前までは下校するたくさんの生徒たちであふれかえっていた校門も、すっかり静かになっていた。

見なれない学校の風景はふだん木の実がかよっている学校とは別世界のようで、入るのがちょっと恐い気がした。

木の実は赤いランドセルのベルトを握りしめ、校舎にむかって走り出した。

下駄箱に突入し、上履きにはきかえ、四階まで一気に階段をかけのぼる。

誰もいない学校はひっそり静まりかえり、ただ木の実の走る足音だけがバタバタと反響した。昼間なら先生に廊下を走るなと怒られるところだ。

四階の廊下に出ると、自分のクラス・四年三組の札が目に入る。

教室の前までくると、そろそろとドアを開け、中に入っていった。

誰もいない教室。

理路整然と並んだ机とイス。

それらの机の中央に、

大きな

大きな

とってもおっきな

メロンがのっていた。

木の実はしばらくあっけにとられ、その大きなメロンを見つめていた。

こんな大きなメロンは見たことがない。

木の実が両手でギリギリ持てないくらいの大きさだ。

去年パパが出張で北海道に行ってきた時にお土産で買ってきてくれたメロンも大きかったが、これは更にその倍くらいはある。
こんなサイズのメロンがこの世にあるのだろうか。いやそれより、なんで放課後の教室に、メロンが置いてあるのだろうか。
「なあんだ」
しばらく考えた末、木の実は結論に達した。
「これは夢なんだ」
そう思うが早いか、メロンがふわりと宙に浮かんだ。
木の実はその現象を素直にうけいれ、メロンに向かって歩いていった。メロンもふわふわ宙をただよいながら、こちらに近づいてくる。
頭上までやってきたメロンに、木の実は両手を差しだした。
その両手から逃げるように、メロンは一瞬、素早い動作で天井近くまで浮き上がり、そして、勢いよく、落下した。
静かな教室に、木の実の頭蓋骨がくだける音だけがこだました。

1　謎の転校生

美佐子は教壇の横に立っている、今日から新しくクラスメートにくわわったその少女を見つめていた。
小さくてかわいくて、まるでお人形さんのようだ。なのに、なんとなく、恐い。目つきがするどいというか、近寄り難い雰囲気がある。腰まである長い髪の毛はつややかで美麗だが、洋服は地味で、白いブラウスに無地で紺色のジャンパースカートを着ている。精錬されているのにどこか野性的な匂いをただよわせていた。
数日前、転校生がくると聞かされてから、クラスは話題でもちきりだった。どんな子がくるのか、興味深々だった。平凡な小学校生活にとって、新しい仲間というのは新鮮な刺激になる。
とはいっても、最近この成城南小学校はあまり平凡な日々とは言えないような、奇怪な出来事が連続してはいた。

以前ある先生が教えてくれたのだが、この小学校は数十年前の設立以来、おかしな出来事はずっと日常茶飯事らしい。幽霊が出没するトイレ、動きだす理科室の標本、どこからともなく聞こえてくる声など、一般の小学校によくある七不思議のような伝説も、この小学校ではぜんぜん珍しいことではなかった。それにしても今年巻き起こった陰惨な事件は、ちょっと特別らしい。

特に、クラスメートの木の実ちゃんが謎の死をとげたのは、わずか一週間前のことだ。

木の実ちゃんは放課後の教室で、なにかボーリングの玉のような、大きくて丸いものに押しつぶされたように、ぺしゃんこになって死んでいたのだという。死因は頭蓋骨骨折だった。三月のあの忌わしい惨殺事件の記憶もまだなまなましいままだったので、校内は一時騒然となった。

この一週間の四年三組は、クラスメートの死とまだ見ぬ新しい転校生への期待がないまぜになり、なんだかおかしな雰囲気が支配していた。

「ええと、今日からみんなの新しいクラスメートになる」

芳井先生が黒板にチョークを走らせる。

「こ……ひ……め……しょう……こ……ちゃんです」

黒板には「こひめしょうこ」とふりがながふられた「湖姫翔子」という漢字がきたない字で書きこまれた。

芳井先生は女子の名前を〝ちゃん〟づけで呼ぶ。それがなんとも気持ち悪い。

「みんな、仲良くしてくださいね」

そう言って、芳井は転校生の背後から手をのばし、その小さな頭をなでようとした。転校生はすみやかに頭をずらし、紙一重でその手をよけた。教室からクスクス笑いが聞こえ、芳井がコホンと咳をする。

「え、ええと、それじゃ、翔子ちゃん、みんなに自己紹介してください」

小さな少女は上体を前に六十度かたむけおじぎをし「湖姫翔子と申します。よろしくお願いします」と言った。まるで大人がしゃべっているような、しっかりとした口調だった。

美佐子はいま見た光景が信じられなかった。芳井は背後から手をのばしたのに、この転校生は一度も振り返ることなくその手をよけてみせた。頭の後ろに目がついているとしか思えない。

美佐子はこの転校生に少し興味をおぼえた。

「しっかりしたあいさつですね。感心感心。それじゃ翔子ちゃん、君の席はあそこですよ」
芳井は空いている席を指さした。少女は歩き出す。
一週間前まで木の実が座っていた席だ。
「いてっ！」
と転校生が通りすぎた瞬間、ふいに男子生徒が叫んだ。
イタズラ好きの健太郎だ。真っ赤な顔をして、転校生をにらんでいる。
どうせいたずらでもしようとして足を踏まれでもしたのだろう、と美佐子は察した。
「この野郎、よくもやったな」
健太郎は立ち上がり、すでに席に座っている転校生にむかって歩きはじめる。教壇を見ると、芳井がオロオロとして成り行きを見守っていた。つくづく情けない先生だ、と美佐子は思う。
「やめなよ、健太郎くん。授業中だよ」
そう健太郎を制したのはすぐ側に座っていた学級委員の黒崎光輝（くろさきみつてる）だ。美佐子の胸がドキリとする。成績優秀スポーツ万能でハンサムな光輝は、女子のあこがれの的なのだ。
健太郎はちぇっと舌をならすと、席に戻った。さすがの健太郎も光輝にはさからえない。
人を威圧する、リーダー的素質が光輝にはあるのだ。
美佐子はしばらく転校生のことも忘れ、光輝の横顔にみとれていた。

2　動き始めた影

湖姫翔子は初日の授業を終え教科書を真新しいランドセルに入れようとしたとき、そのノートの切れ端に気がついた。それはランドセルのカバーの内側に、セロテープで貼ってあった。
〝コヒメショウコさんへ
はじめまして。成城南小学校へようこそ。

これからまいにちいっしょにきみと勉強できることをうれしくおもいます。まだなれないこともたくさんあるとおもうけど、おたがいちからをあわせて、がんばっていきましょう。

きみがこの学校にてんこうしてきたきねんに、ささやかなプレゼントをよういしました。それをぜひわたしたいので、授業がおわったら、体育館裏までひとりできてください。まってます。

きみのことをかんげいするクラスメートより〃

翔子はノートの切れ端を引きはがすと、クシャクシャに丸めてランドセルの底に放りこみ、立ち上がった。

「あの、翔子さん」

声をかけられ振りむく。クラスメートの女子が立っていた。少し恥ずかしそうに、はにかんでいる。

「わたし、美佐子ってゆうの。よろしくね」

美佐子は両手を胸のあたりでからませながら、もじもじと言葉を発する。翔子は一ミリくらいの笑顔をつくってそれに応えた。

「ねえ、翔子さんって高羽町に住んでるんだって。わたしもなの。よかったら一緒に帰ろうよ」

翔子はギリシャの彫刻のようにふたたび表情をかたくし、少し考えるふりをしてから

「悪いけど、ちょっと約束があるの」と断った。「明日から一緒に帰りましょう。今日は失礼します。ごめんなさい」

「そうだったのかあ。仕方ないな。じゃあ、またあした」

美佐子は少し残念そうな笑みをかえして、教室を出ていった。翔子はその後ろ姿を無表情に眺めながら、ゆっくり自分も外に出る。

外はとてもいい天気だった。

校庭は下校中の生徒であふれている。

翔子はそれらの群れから離れると、ひとり体育館裏へとむかった。

体育館の裏は、まだ誰の姿も見当たらなかった。フェンスと体育館に挟まれた細長い敷地は雑草が生い茂り、角には用具室が建てられ校庭からの視界

がさえぎられている。フェンスの向こうは森。ある意味、完全な孤高の場所だ。ここなら誰が何をしても気付かれないだろう。

翔子はランドセルをおろすと、体育館裏口からつきでたコンクリートの階段に腰かけ〝クラスメート〟の登場を待った。

すぐに用具室の後ろから数人の小学生が姿を現す。

朝、席につくときシャープペンシルの消しゴムで太ももをつつこうとした、あの男子生徒だった。確か健太郎とかいう名前だ。背後に二人の男子をひきつれていた。三人ともその手には武器のようなものが握られている。健太郎はバット、背後のひとりが両手に上履(うわば)き、もうひとりが縄跳びを持っていた。

今朝、翔子が素早い腰の動きでシャープペンシルを押しかえし、逆に芯の先を自分の掌に突き刺してしまったその仕返しなのだろう。

「正義の三銃士ここにあらわる、ってトコかな」

健太郎がバットをぶらぶらさせながら近づいてきた。

「自己紹介まだだったね。ボクの名前はザビタン。こいつがボクの仲間でイビル。そしてこっちがガブラだよ。よろしく。まーでも、どうせ君の命も今日限りだけどね」

そういって三人はクククと笑った。

「さっきはよくもやってくれたな。おかげで掌にイレズミができちゃったよ。転校生だからまだボクの恐さを知らなかったのは仕方ないけど、ちょっとやりすぎたね。ザンネンだけど、正義の制裁をくわえさせてもらうよ」

健太郎は翔子の前まで来ると、威嚇するようにバットの先を翔子の目の前にかざした。

翔子は右手をバットの先に当て、勢いよく前に押し出した。

バットの柄が健太郎の鼻を直撃する。

ぐわっと叫んで健太郎が仰向けに倒れ、鼻血が吹きだした。

もろすぎて話しにならない。

「こ、こ、こ、この野郎！　ふざけやがって！　お前ら、やっちまえ！」

健太郎が仲間の二人に命令をはなつ。

二人が同時に襲いかかった。

ひとりが両手に握った上履きで二刀流に襲いかかる。トンファーか何かのつもりだろうか。もうひとりは明らかに鞭のつもりで、縄跳びをふりまわす。

遅い。
翔子はいとも簡単に縄跳びをつかんでひったくると、そのまま上履きの脳天へカラ竹割りに、振りおろした。上履き男は声をあげるまもなくうずくまり、次の瞬間、もうひとりの首に縄跳びを巻きつけた。間髪を入れず、首を押さえて苦しがる少年のみぞおちに、膝を入れる。それで終わりだった。
「ち、ちくしょう。お、おぼえてろ！」
健太郎は鼻血をぬぐうのも忘れ、うずくまるふたりの仲間の襟元をひっぱり、いちもくさんに逃げ出した。ふたりの仲間もひいいと叫びながら、健太郎の後をこけつまろびつ逃げてゆく。
翔子はその情けない後ろ姿を無表情で見送った。
階段の脇に置いておいたランドセルに手を伸ばし、帰ろうとすると、背後で突然、拍手が聞こえた。
パチパチパチパチ……。
驚いて、振り向く。
フェンスの向うに、森を背にして男子がひとり立っていた。
「お見事お見事。いやあ、お手並み拝見させてもらったよ」
翔子の全身に軽い冷や汗がにじみでた。
いつからそこにいたのだ。
「やっぱり強いね。成城南小学校札つきの悪ガキたちも、君にかかっちゃ赤子同然だ。さすがさすが」
こいつは確か今朝、健太郎の悪ふざけを注意した学級委員の黒崎光輝とかいうやつだ。なぜ今まで気配を感じなかったのだろうか。
「さすがは一子相伝の中国拳法・炎神拳（えんしんけん）十六代伝承者、湖姫龍宝（りゅうほう）の娘だけのことはある。十七代宗師を継承する日も近いかな」
「お前」
翔子は身構えた。「なぜそれを知っている」
「君のことはちょっと調べさせてもらったよ。なに、転校生には誰もが興味深々てやつでね。なんでも君の祖先は代々中国の皇帝を守護する僧侶の家系だったんだってね。日本に渡ってきたのはおじいさんの代あたりかい。それがなんで、この成城南小学校に転校してきたのかな」
「そんなことお前には関係ない」

翔子は金網ごしに鋭い目で睨む。
「おっと。ここで君とことを荒立てるつもりはないよ。今日はちょっとしたご挨拶だけ。これ、約束のプレゼント」
光輝は握っていた黒い物体を指ではじいて、フェンスごしに投げた。翔子はそれをキャッチする。
「なんだこれは」
翔子には汚らしい石ころにしか見えなかった。
「それは去年、中国雲南省へ旅行に行った時に買ってきたんだ。珍しいだろう。こんな大きなテクタイトの原石は滅多にないよ。この石は中国では古代より炎の真珠と呼ばれ、神聖な石とされてきた。僕は天然石を集めるのが趣味なんだ。宝物だったけど、君にあげるよ。テクタイトは霊的能力を高める効果もあるらしいよ」
「いらん。こんなもの」
「いいから」
光輝はフフフと笑う。「以前までテクタイトはかつて数万年前に地球にふりそそいだ隕石だという説が有力だったけど、現在では否定されている。実際のところは巨大隕石が地球に衝突した際、地球の物質がとけて大気中に雲散し、それが急激に冷やされてガラス状になったものらしいよ。ああこれ、パワーストーン豆知識ね」
「興味ない。宝物ならお前が持っていればいいだろう」
「ぜひ君に持っていてほしいんだ。単なるガラスだって知ってから僕、興味を失っちゃってね。それじゃ、これからもよろしく」
光輝は後ろを向くと、森の中へと消えていった。
翔子は褐色の石をポケットに入れると、もとの校舎に戻っていった。

3　明かされた宿命

芳井味敏は湖姫翔子の机に手を入れた時、一本の笛が入っているのをみつけた。
これは……木の実ちゃんの笛。まだこんなところに。

数カ月前、赴任早々、美佐子ちゃんに教室で放課後の楽しみを目撃されて以来、女子の間では自分の悪い噂がひろまってしまい、体操服も笛も上履きも女子だけはみんな毎日家に持って帰るようになってしまった。

これは久しぶりの収穫だ。

芳井はへへへと笑うと、席にすわり、メロンの刺繍の入った袋から笛を取り出しそっと口にくわえた。

ピーと音を鳴らしてみる。

縦笛の単調な音色とともに、木の実ちゃんの甘い唾の味が口内に広がってゆくようで、嬉しくなる。

「ああ、木の実ちゃん。なんで木の実ちゃんは死んじゃったの……」

芳井の頬にひとつぶの涙がつたった。

「――まだそんなことをやっておるのか、お前は」

いきなり声がし、びっくりして椅子からころがり落ちた。

教室の入口に、いつのまにか翔子が立っている。

「しょ、翔子ちゃんじゃないですか。来たなら来たと言ってください。びっくりしますよ。遅かったですね」

「ちょっと他に約束ができてな」

「約束」

芳井はぎくしゃくと起き上がり、席に座りなおす。「もう友達ができたんですか。早いですね。いつになく社交的じゃないですか。この学校は合うみたいですね」

「合うものか」

翔子は眉にシワをよせ、教壇の机に飛び乗り、足を組んで座った。まるで先生と生徒が逆になったようである。

「――聞かせてもらおうか。今度の任務を」

「はいはい。では早速」

芳井は汚い鞄からゴソゴソと書類をひっぱり出し、話しはじめた。

「ええと、この成城南小学校は三十年前の設立以来、奇怪な出来事が続出してまして、詳しくはこの書類に箇条書きでまとめてありますが、まあほとんどはどこにでもある学校の七不思議といったものの範疇でして、特別CSCUの人間が騒ぎ立てるほどのものはありません。ところが」

芳井は教壇まで歩いていって、書類を翔子に渡した。
「今年起こった事件は少々常軌を逸してててですね、何十人もの生徒が原因不明の死に至った。警察の捜査も皆目進展なく、小学校ということでこれ以上立ち入った捜査もままならないということで、われわれＣＳＣＵの出番となったわけです」
「どんな事件だ」
「なんでも突然、生徒が血だらけになってバタバタ死んだらしいんですな、これが。まるで透明な獣か何かが食い荒らしたようなというか。ただ鑑識によると、歯形のようなものは確かにあったようですが、獣というよりは人間の歯に近かったと」
そう言って、芳井は歯をカチカチ噛み鳴らした。
「それはよく起こるのか」
「いや、今年の三月に一日だけでして、それからずっと何も起きていなかったんですが、一週間前、このクラスの木の実ちゃんがですな、何か大きなボールのようなもので押しつぶされたように、死んでいたんです。可愛い子だったんですけど」
芳井は目をつぶり、震えながらまぶたの隙間に涙をにじませた。
「ふむ」
翔子は書類に目を通している。すべてに目を通すと、クシャクシャまるめて芳井に放り投げた。
「もういいんですか」
「頭に入れた。芳井、調べてもらいたい」
「はい、なにを」
「まずその最初の殺戮事件の起こった三年三組全員のリストだ」
「はいはい」
芳井は内ポケットからボロボロの手帖をとりだして、ボールペンで書きはじめた。
「それから」
しゃべりながら、翔子はポケットから褐色の石を取り出す。「学級委員の黒崎光輝。こいつの詳細を知りたい。出生、経歴、親族、身辺、すべてだ」
「はあ」

芳井はボールペンの先を舐めながら翔子を見る。その舌にインクの線がくっきりひかれているのが目に入り、翔子は気持ち悪そうに顔をしかめた。
「黒崎くんですか。彼はいい生徒ですよ。小学四年生とは思えないしっかりとした男の子で……」
「ばか者。だからお前はダメなのだ。恐らくあいつが黒幕だぞ」
「黒崎くんが？」
「しかも本人がそれを隠そうとしていない。すでにわたしの正体もある程度はつかんでいる。これは」
翔子は窓の外へ石を放り投げた。「わたしに対する挑戦だ」
石は勢いよく飛んで、校舎の手前でぽとりと落ちた。
「黒崎くんが……信じられませんね」
翔子は窓の外をじっと見つめている。石を投げたポーズのまま、しばらく固まっていた。
「ふむ」
何か気がついたように、芳井の方を向く。「それからこの成城南小学校についても調べてくれ。地理、歴史、すべて」
「はいはい。すべて」
芳井は手帖にボールペンを走らせる。
「今のところは以上だ。では」
翔子は教室を横切り、出口へと向かう。
「それからこれは資料として貰っておく」
手帖から顔をあげると、出てゆく翔子の手に木の実の縦笛が握られていた。
「ああ、それは記念に……」
言い終わる前に、翔子の姿は視界から消えていた。

4　引き裂かれた調理実習

美佐子は翔子の割烹着（かっぽうぎ）姿を見て、おかしさがこみあげてきた。
吹き出しそうになるのをこらえながら、用意された食材を並べ準備にとりかかる。

今日は家庭科の調理実習の日だった。四年三組は複数の班に分かれ、カレーライスとみそ汁を作る。美佐子と翔子は同じ班だった。

横目でちらりと翔子を見ると、なんだか居心地悪そうな顔をしている。もともと無表情なので、そう見えるだけかもしれない。とにかく翔子の大理石のような整った顔立ちに、割烹着姿はしっくりきていなかった。

「本当はね、今日は木の実ちゃんとカレーライスをつくる予定だったの」

と美佐子は話しかけた。「木の実ちゃん死んじゃったから、翔子ちゃんが転校してきてよかった。いつもお母さんの夕食のお手伝いしてるけど、やっぱりひとりいないと心配だし」

「そう」

「翔子ちゃんは料理とかするの？」

「したことない」

翔子は短く答え、しばらく間を置いてためらいがちに、

「――あの、昨日はごめんなさい」と言った。

「えっ」

「あの、一緒に帰れなかったこと」

「ああ、ううん。いいよ」

翔子の意外な言葉に、美佐子は微笑んだ。

美佐子は思いがけず翔子と話しをする機会ができて嬉しかった。翔子は少し恐い雰囲気があるが、根はいい子なのではないかと思う。いい友達になれるだろうか。

美佐子は先生の目を盗んで味噌汁のダシに使う煮干(にぼ)しをたまにつまみ食いしながら野菜を切っている。翔子は無表情に美佐子の手もとをみつめていた。

「翔子ちゃんはどうしてこの学校に転校してきたの？　ひっこししたの？」

「お父さんの仕事の都合」

「へえ。そうなのかあ。翔子ちゃんのお父さんって、なにやってるの」

「公務員」

「へえー、公務員なんだ。安定してるんだよね、公務員って。あ、翔子ちゃん、ジャガイモ切ってくれる？」

翔子はジャガイモをひとつ手にとった。しばらくジャガイモをじっと見つめた後、まな板に置いて、包丁を手にとり、無造作にざくざく切りはじめる。

「ああダメ、翔子ちゃん。まず皮をむくんだよ、これで」
美佐子は翔子に皮剥きを手渡す。翔子は皮剥きを手にすると、どうしていいのかわからず、そのまま止まっている。美佐子は「こうするの」と言って翔子の手首をとり、二三回ジャガイモの皮を剥いてみせた。翔子は教えられた通りにやりはじめた。
「美佐子さん」
しばらくして翔子が話しかける。「木の実さんって、どんな人だった」
「木の実ちゃん?」
美佐子はいきなり翔子が質問をしたので驚いた。翔子の雰囲気からして、およそ他人に興味を持つような性格にはみえなかったのだ。
「木の実ちゃんはねえ」
美佐子は鍋の底で玉葱を炒めながら話しはじめる。「友達だったんだよ、わたし。すごくおてんばでねえ、面白い子だったの。だから木の実ちゃんが死んじゃったとき、とても悲しくて、泣いちゃったの」
「木の実さんはなんであんな事件に巻き込まれたのかしら」
「知らない。あ、翔子ちゃん、鍋に水入れて」
翔子は言われた通り、ミネラルウォーターのペットボトルの蓋を開け、鍋に水を入れはじめた。しばらくまた無言が続いた。相変わらず美佐子は煮干しをもそもそ食べている。
「翔子ちゃんはカレー好き?」
翔子はしばらく考えてから、「うん」と言って首を縦に振った。
「木の実ちゃんもカレー大好きだったんだよ。木の実ちゃんちでカレーごちそうになったこともあるの。すごくおいしいんだよ、木の実ちゃんのお母さんが作ったカレーって。デザートのメロンもすごくおいしかった。木の実ちゃん、メロンが大好きだったの」
「メロン」
鍋をみつめながら、翔子がぼそりと呟く。
「これでよしと」
鍋をかき混ぜながら、美佐子は言った。そして袋から煮干しを二本とりだし、ひとつ自分の口に入れて、もうひとつを翔子の口元へもってゆく。
「翔子ちゃん、はい。あーん」

翔子はビクッと身体を震わせ、驚いたように目を開いて煮干しを見つめた。そして恐る恐る口を開き、美佐子の手から食べようとして、やはり恥ずかしいのか、いったん手で取って自分の口に入れた。美佐子がくすりと笑う。

「わたしね、翔子ちゃんとお友達になりたいな」

「友達」

翔子は美佐子と目を合わせずにその言葉をくり返し、鍋の中を見つめていた。美佐子も笑って鍋の中をのぞきこむ。

「灰汁(あく)が出てきたらこれでとるの」

と美佐子はお椀とお玉を指さす。

「灰汁」

「ジャガイモはもうちょっとあとで入れるんだよ。早く入れるとカレーがドロドロになりすぎちゃうから」

「ジャガイモ」

美佐子の言葉を噛みしめるように復誦する翔子は、もの静かながらとても熱心に見えた。

美佐子は翔子はやはりとてもいい子なのだと思った。

「あ。光輝くんだ」

美佐子はこれまでと打って変わった明るい声を出し、隣の班を見やる。それまで教室の離れた場所にいた光輝が、隣の班までやってきていて、料理のやり方をクラスメートに手ほどきしているところだった。

「すごいなあ。光輝くんってなんでもできるんだね。かっこいいね」

美佐子が小声で翔子にささやく。翔子は一度美佐子の顔を見てから、光輝を見た。そしてまた鍋の中を向き直ると、意味もなくお玉で鍋をかきまわす。

「湖姫翔子さん」

とつぜん声をかけられ顔を上げる。家庭科の谷崎雅子先生だった。

「芳井先生から伝言よ。さっきお母さんから電話があって、すぐに連絡ほしいんですって。なにかあったのかしら」

翔子はお玉を手放すと、

「ごめんなさい。行ってくる」

と美佐子に謝り、教室を出ていった。

5　サイレンは地獄の調べ

翔子は校舎の裏庭に出ると、携帯をかけた。
「もしもし。芳井か。わたしだ」
「もしもし、ああ、翔子ちゃんですか」
「どうした」
「いやね、昨日頼まれた調査結果がでましたので、お知らせに」
「そんなこと、後でいだろう。授業中に呼び出すのは非常の時だけにしろと言ったはずだ」
「まあ早い方がいいと思ったもんですから」
「本当の非常事態のときはどうするのだ。母上から電話なんてそう滅多にあるものではないぞ」
「非常事態だってそうあるもんじゃないですよ。それに家庭科の調理実習なんてどうでもいいじゃないですか。料理するなんて柄じゃないでしょう」
「どうでもよくない！」
思わず叫んで、翔子はそれを取り繕(つくろ)うように咳払いをする。
「どうしたんですか。珍しく大声なんて。家庭科の授業は楽しいですか」
「うるさい。調査結果を教えろ」
「はいはい。調査結果」
紙をめくる音がする。「――まず事件の起きた三年三組ですが、生徒は今の四年三組と同じですな。今年の進級はクラス編成をおこなわず、去年と同じにしたそうです。同じにしたことに特別な理由はないそうです」
「同じ」
「はいはい。同じ。当然、黒崎くんもいたわけですな。でその黒崎くんですが、彼はかの日本最大のメディア・コングロマリットとして名高いキューブ・グループの代表・黒崎光嶺(みつみね)の長男ですな。数年前、前社長が交通事故で亡くなってから、当時副社長だった黒崎光嶺が社長に就任したそうです。かなりワンマンな経営者という話しですが、彼が社長に就任してからキューブ・グループの業績は飛躍的に伸びているそうで。ただ裏の世界とのつながりも噂され

ておりまして、一筋縄ではいかない人物であることは確かです。まあ詳しくはかなり長い文書にまとめてありますので、後でメールで送っておきますよ」
翔子は無言で聞いていた。書類をめくる音。
「――最後に成城南小学校のことですが、これも詳細にわたった情報を文書にまとめてありますので、メールしますです。一応めぼしい情報としましてはですね、まあ関係あるのかどうかは解りませんが、この小学校は周囲を広大な森で囲まれた中にポツンと建っているわけですが、三十年前この学校が建設されたとき、すでにこの辺りは木がなく、ちょうど現在小学校が建っている敷地に森がぽっかり空いていたと」
「どう言うことだ、それは」
「はいはい。それがですね、最近この辺りの土を調査した地質学者の説によりますと、大昔、この地点にかなり巨大な隕石が落下した可能性があるそうです」
「隕石」
「そうですね、隕石。周囲の石に含まれる物質によりこれはほぼ明らかな事実だそうで、これはまあ別に関係ないことかもしれませんがね」
「大ありだ。芳井、よく調べた」
「はいはい。ほめられて光栄ですよ。まあ私からの報告は以上です。あとはメールで」
「わかった。わたしは授業に戻る」
翔子は携帯を切った。

翔子は小走りに教室へと向かっていた。
無性に、またカレーの鍋の中を覗きこみたくてしょうがなかった。それがなぜだが、翔子自身には解らない。
思えば同級生と一緒に料理をした経験など、初めてのことだった。
そして記憶に浮かぶ鍋の表面になぜか、美佐子の笑顔が重なる。
教室の前まで戻ると、クラスが妙に騒がしかった。そろそろ家庭科の時間も終わる頃だが、食事をしながら歓談しているような感じではない。不穏な空気が漂っている。
翔子は胸騒ぎを覚えて、教室に飛びこんだ。

ちょうど翔子や美佐子のいた班のあたりに、クラスの皆が集まっている。
近づいてゆくと、群れの中から谷崎先生が翔子に気がついて、声をあげた。
「湖姫さん！」
そのままゆっくりとこちらへ歩いてくる。
「大変なの」
なんだろう。この胸の内側をかき乱されるような不安は。
「美佐子さんが……カレーを食べて……倒れたの」
皆が翔子に気がついて、左右に道を開ける。
テーブルの上には、美佐子の食べかけのカレーと、その横に、まだカレーをよそっていない空の皿とスプーンが乗っていた。
「美佐子さん……さっきまで……湖姫さんが戻ってくるまで待ってるんだって……食べないで待ってたんだけど……もう授業が終わっちゃうからって……わたしが言ったらやっと食べはじめて……そしたら半分くらい食べて……いきなり血を吐いて……」
谷崎先生が泣き崩れる。
テーブルの向こうに、黒崎光輝の腕に抱かれ美佐子が白い顔で倒れていた。
「美佐子さん、しっかりして。翔子さんが来たよ。美佐子さん！」
光輝が叫んでいる。女子はみんな泣いている。
美佐子の口の中は、赤かった。
光輝の手には、美佐子の口から流れでた血をふきとったとおぼしき、赤く染まったハンカチが握られていた。
救急車のサイレンが聞こえてきた。

6　恐るべき秘密

翔子はひとりで病院を出ると、あてもなく街を歩いた。
美佐子は意識不明のまま病院に運ばれ、さっき息をひきとった。翔子はずっと側にいたが、最期まで意識は戻らなかった。
公園を見つけ、ブランコに座って遊んでいる子供を眺める。滑り台では数人の子供が鉄の梯子を登り、アルミの板を滑っては、また登っている。それ

をさも楽しそうに、くり返す。砂場では子供がひとりで砂をほじくりかえし、山をつくったりトンネルを掘ったりしている。翔子にはあんなことをして遊んだ思い出もなければ、何が楽しいのかもさっぱり解らない。

ただなんとなく、うらやましかった。

携帯が鳴る。

「もしもし」

「翔子ちゃんですか。どこにいるんですか。すぐに戻ってくるって言ってたじゃないですか」

「捜査中だ」

「はあ。それより大変な展開になりましたよ。健太郎くんが逮捕されちゃったんですよ」

「健太郎が」

「はいはい。あの健太郎くんです。彼の机の中に、青酸カリの瓶が入ってたんですね。問いつめたら、なんでもあなたに散々な目にあった復讐のつもりだったとかで。最近の小学生は本当に恐いですねえ。こんな仕事していて今さらこんなこと言うのもなんですけど」

「バカ者。健太郎は単なるカモフラージュだ。解らないのか」

「カモフラージュって。じゃあやっぱり、光輝くんが……」

「芳井、健太郎と話しがしたい」

「はあ。ああ、はいはい。手配しておきますよ」

「今日中にだ」

翔子は指をたたきつけるように携帯を切った。

放課後。警察署までやってきた翔子は、白い部屋に通された。

部屋の中央に、退屈でしょうがないといった顔で、健太郎が座っている。

健太郎は翔子を見ると驚いたように顔を上げ、やがていぶかしげに睨んだ。

「なんだよ。なんでお前がこんなところに……」

「聞きたいことがある」

「ああん。お前に話すことなんか……」

「その前にこちらが知っていることを言おう」

健太郎の言葉の語尾を切り捨てるように、翔子は鋭い言葉を投げつける。

「――まずお前は黒崎光輝と裏でつながっている。昨日体育館裏で襲ったのも今日わたしを毒殺しようとしたのも、奴の命令だ」
「な、なに言って……」
「表面的には」
翔子は健太郎を無視して続ける。「お前らは悪ふざけでクラスをトラブルに巻き込む悪ガキとそれをいつも注意する優等生という間柄を装っているが、その裏で主従関係を結び、光輝が優等生の顔では出来ない裏の仕事をお前が実行する手筈になっている」
健太郎はもう口をぱくぱくさせながら聞くのみだった。
「奴の目的は成城南小学校の地下に眠る隕石。天然石マニアである奴は、これを手に入れようとしている。そのために成城南小学校に累を重ね、廃校に陥れようとしている」
「し、し、知るかよ、そんなこと……」
「わたしが知りたいのは奴の使った方法だ。今年の三月の虐殺事件。そして一週間前の死亡事件。奴の父が経営するキューブは日本最大のグループ企業として圧倒的な財力と技術力を誇っている。どんなテクノロジーを持っていてもおかしくはない」
「ば、バカ、誰がお前なんかに……」
「それからひとつ、これだけは言っておく」
翔子は指を一本たてて、健太郎の鼻先につきだした。「奴にとってお前はもう用済だ。どうせ光輝のコネを使ってすぐに釈放してもらう約束でもされたのだろうが、それはあり得ない。我々はすでに黒崎家の犯罪のしっぽをつかんでいる。奴らに捜査の手が回るのも時間の問題だ」
健太郎がカタカタと震えだした。
「お前がここで正直に証言すれば、同時にお前の犯罪も奴に強要されたことを証明することになり、罪は軽くなる。拒否すれば、恐らく十代のうちには出られない。いや、出さない。われわれはそれだけの権力を行使できる位置にある。お前ひとりの命くらい闇に葬ることだって簡単にできる」
「お、お、お、お、」
「近日中に逮捕状が奴の自宅に届くかもしれないぞ。早く口を開かないと手遅れだ。よく考えるがいい」

「……お、お前、何者なんだよ！」
「わたしか」
翔子はランドセルを下ろし、底の錠前部分に刻印されたマークを見せた。
〝ＣＳＣＵ〟
そう刻まれていた。
「な、なんだよ、それ」
「カウンター・スクール・クライム・ユニット。政府の学生犯罪対策本部だ。わたしはそこの特務捜査官だ」
「はあ!?」
健太郎は口を漫画のようにあんぐりと開けた。小学生には想像を超えた説明だった。「な、なんだかよく解らないけど……す、すげえ」
健太郎の声には、それまで感じていた恐怖を押しのけ、興奮に近いものがこみあがってきていた。ただの小学生とは思えなかったが、まさかそんな大層なものだったとは……。
ただ健太郎の頭では政府の特務捜査本部などという概念は解りづらく、むしろＳＦ的な聞こえようではあったが。
「ど、どうして小学生なのにそんなのになれるんだよ？」
「生まれたときからの宿命だ。わたしの家系は代々、時の権力者や要人を守る職業についてきた。犯罪がより多様化かつ複雑化した現在では、警察の手の及ばない犯罪を秘密裏に取り扱う政府の闇の機関としてその活躍の場が広がっている。ＣＳＣＵはそのひとつだ」
「あう……」
健太郎は言葉もなくうなずいている。解らないながらもすごさは伝わっているらしい。
「これでわかったな」
翔子はずい、と前に出る。その小さな身体が健太郎を見下ろすように、威圧した。「さあ答えろ。奴の使った遠隔操作で人を殺傷する方法とはどんなものだ」
「よ……よくわかんないんだけど」
健太郎は震えながら、語りはじめた。
「み、光輝はあれを〝空中幻想固定装置〟って……呼んでいた」

「空中幻想固定装置？」
「あ、ああ。こいつはすごいぜ。なにせ、人が想像したものが現実になっちゃう装置なんだ。美奈子先生はゾンビ映画のファンだったんだ。顔に似合わず気持ち悪いものが好きでさ、よく授業中もゾンビの話しをしてたよ。そのうち、先生の想像のゾンビが実体をともなって、殺戮をはじめたんだ。美奈子先生にしか見えないんだけど、見えないだけで、人間ならだれでも殺すことができるんだ」
「そんなもの、今の人類の科学力でできるものか」
と翔子は言い放つ。
「あ、あれは偶然だったんだ」
健太郎は両手を振りながら説明する。「光輝は最初、隕石の埋まっている場所を探すために、学校に探知機のようなものを仕掛けたんだ。中国で買ってきた鉱物みたいなものを研究して、隕石から放射される独特の波動みたいなものをつきとめたらしいよ。よくわかんないけど」
翔子は光輝に貰ったテクタイトの原石を思い出した。翔子があれを窓から投げた時、石はまるで地面に吸い付くように、校舎の手前にポトリと落ちた。恐らく四年三組の真下あたりに隕石は埋まっているのだろう。芳井の調査によると、四年三組の真下はちょうど、成城南小学校の敷地の中心点にあたる。そして四年三組のすぐ下の階は、今年惨劇の起きた三年三組があるのだ。
「ほら、うちの学校はずっと以前からおかしな事件がよく起こっていただろ。君は転校してきたばかりだから知らないだろうけど。それらの怪奇現象は地下に眠っている隕石の波動のせいなんだって、光輝は考えた。最初は隕石と似たような波動を流し、それに共鳴する地点をつきとめることによって、隕石が埋まっている位置をみつけようとしたんだ。ところが予想外の現象が起こってしまった。学校に仕掛けた隕石探知機の放出する波動と地底に眠る隕石の波動が共鳴し合って、その中心に人間の強い念のようなものがからみつくと、幻想が実体化してしまうんだ」
翔子は一応納得したように、ふんと頷いた。
「よくわかった。それで、三月に事件を起こしてから一週間前の死亡事件まで四ヶ月、どうしてこの間、何も起こさず静かにしていた。学校を廃校に持ち込むのなら、連続して事件を起こした方がいいだろう」

「そ、それが……なぜか突然、空中幻想固定装置が作動しなくなったんだ」
「作動しなくなった？」
「うん。本当は新学期がはじまってから、すぐに二度目の殺戮を実行する予定だったんだよ。ところが、今回は波動が共鳴しなかった。何も起こらなかったんだ。光輝は最初、何か強い幻想を抱いている者が誰もいなかったんだと思った。そこでそれから毎日放課後になると、空中幻想固定装置のスイッチを入れっぱなしにしておいたんだ。それが、いっこうに何も起こらなかった。ところが、それが一週間前、突然また作動した。理由はわからない」
「その空中幻想固定装置のスイッチはどこにある」
「森の中さ。教室でスイッチを入れると、下手すれば自分の幻想が実体化してしまう恐れがある。そうなったら自分の命が危ないからね。実体化した幻想は、それを作り出した人間を中心に、周囲の人たちを殺傷するんだよ」
「では空中幻想固定装置の本体は？」
「全校生徒の笛の中さ」
「笛」
「そう、音楽の時間に使うあの縦笛さ。考えただろ。笛の仕入れ業者に手を回して、光輝はすべての笛に波動の放射口を仕込んだのさ。これならいちいち教室を回って設置しなくても、まんべんなく全校舎のクラスに行き渡る」
「ははあ」
翔子は納得した。空中幻想固定装置が動作しなかったのも道理である。新学期に入ってから、幸か不幸か芳井のセクハラのせいで、四年三組の女子は放課後、かならず笛を家に持って帰るようになっていた。隕石の真上に位置する四年三組の縦笛が半数近くにまで減っていたのだ。幻想が発生するには波動が弱すぎたのだろう。そしてどうやら、光輝はその事実に気がついていないらしい。
「この笛か」
翔子はランドセルから袋に入った木の実の笛を取り出した。
「そ、そう、それだ」
「そうか。メロンか」
翔子は笛の袋を見つめながら、ひとりごとのようにつぶやいた。
一週間前、木の実は学校に笛を忘れ、それを取りに戻ったところを自ら作

り出したメロンの幻想につぶされ死亡したのだ。スイッチの入っている放課後のクラスに、いつもより一本だけ多く笛が教室に残され、さらにメロンに強い執着をいだく木の実がそこに現れた。空中幻想固定装置が作動するタイミングが四ヶ月ぶりに揃ったわけだ。

「よくわかった。捜査に協力、感謝する。お前は事件が一段落したら、出られるだろう」

翔子はほっと椅子にへたり込む健太郎を後に、部屋を出て行った。

7　仕掛けられたロリータ

成城南小学校の周囲の森はとてつもなく大きかった。

翔子は森の中を走っていた。普通の小学生が校庭を全力で走るほどのスピードで、歩きにくい森の中を進んでいる。走りながらも全身に神経を集中させ、人間の気配を探している。

空中幻想固定装置のスイッチは、この辺りにあるはずだ。

校舎から見えない位置にあるとは思えない。見え過ぎる位置にも絶対ない。場所はだいたい予想がついている。この前、光輝が消えた体育館裏フェンスの向こう。

同じような景色が続く森林は、同じような景色が続くだけに、人間がよく出入りする場所ならおのずと異質な気配を残しているものだ。光輝は必ず学校の帰りこの辺りに寄り、空中幻想固定装置のスイッチを入れているのだ。

翔子は何かを感じて走りを止めた。

このあたりだ。

人の訪れた気配がする。柔らかい土には何度も踏み締められた人の足跡が刻印され、森林の挟間は自然の精気がかすかに弱まっている。この近くに必ず人工の物体がある。

研ぎ澄まされた神経を全身に集中させ、人気（じんき）の流れを逆にたどってゆくと、ひとつの木の側面に空いた穴に目が止まる。いっけん自然の穴に見えるがよく見ると、人工的に空けられた穴だった。大きさは大人のこぶしがすっぽり入るくらい。

手を伸ばし中に触れると、とつぜん視界が閃光(せんこう)につつまれ木が轟音とともに爆発した。くだけ散る木々の破片とともに、翔子の姿が宙を舞う。爆風に飛ばされたとみえ、その実、紙一重で爆発による被害を回避したのだった。

柔らかい土の上に着地し目をこらすと、もうもうとたちこめる煙の向こうから子供の姿が浮かび上がる。

「黒崎光輝」

やられた、と翔子は悟る。光輝は自分がここに来るのを予期していたのだ。

頭上からヘリコプターの音が微かに近づいてくるのが聞こえた。

「――やあ翔子さん。日曜日だというのに登校おつかれさま。僕も見習って、ちょっと顔出してみたよ。優等生の僕としては、こういうぬけがけは黙っておけないものでね」

と言って光輝は肩をゆらせて笑った。髪をいやらしくなでつけ、紺のブレザーを着て片手をポケットにつっこみ、もう片手に登校時に班を先導する黄色い旗をもっていた。

ヘリコプターの音が大きくなってくる。見上げると、森の上空に大きくその姿を現していた。

「残念だったね。君が健太郎にコンタクトをとることは予想済さ。無駄足させて悪かったけど、空中幻想固定装置のスイッチはここにはない」

「スイッチはどこにやった」

「学校にあるよ。僕たちのクラス、四年三組の教室さ」

そう言って光輝は内ポケットから携帯を取り出した。

「学校」

翔子は学校を見た。四年三組の教室だけ明かりがついている。いつのまに。

「そうそう、休日の学校にもうひとり、来ている人がいるよ。四年三組で君が来るのを待ってる。ほら。これ、ついさっき撮影しておいたんだ。君に見せるために」

光輝はポケットにつっこんでいた手をぬいて、その手ににぎられていた携帯を開いて画面を差し出す。そこには四年三組の教室で、芳井が縄で縛られ、教壇にくくりつけられている画像が映し出されていた。クラスの机と椅子は端に寄せられ、床には一面に数千本の笛が並べられている。

「くっ」

翔子が歯ぎしりをする。「どうするつもりだ」
「もちろん、殺すのさ」
光輝は笑って携帯をパタンと閉め、またポケットに入れる。「まずはこいつからだ。最期の最期くらい、自分の好きなものに殺させてやろうと思ってね。自分を殺す者を自分の頭で選ばせてやろうって寸法さ。空中幻想固定装置のスイッチはタイマーで自動的にあと五分後に入る予定になっている。さあ、早く行きなよ。うまくいったら助けられるかもよ。君も犠牲にならないとも限らないけど」
「それほどまでに隕石をほりだしたいのか、お前は」
「隕石？」
光輝は目を丸くしプッと吹き出した。「さすがだねえ。やっぱり君は頭いいよ。そこまで解ったのはご立派。……でも、ちょっと惜しいんだな。ただ単に隕石を掘り出すだけなら、わざわざこんなややこしいことをすることもないだろう。もう知ってると思うけど、うちは天下のキューブ・グループだよ。私立の小学校のひとつやふたつ、買収するくらい簡単なことさ」
「他の目的があるとでも言うのか」
「ううん。目的ねえ……。目的ってほどでもないんだよな。そうだなあ……言ってみればこれは、ゲームなんだよ、ゲーム」
「ゲーム」
「ああ、ゲームさ。キューブ・グループは世界のあらゆるメディアに血管や神経のようにはり巡らされた情報ネットワークを構築し、この情報化社会をリードしている大企業だ。世界経済を制覇する日もそう遠い未来のことじゃない。そしてこの僕こそ、将来その頂点に立つ人間なんだよ。たかが小学校のひとつやふたつ、今からオモチャみたいに弄(もてあそ)べないようではいけないよ。隕石はそのほんのきっかけさ」
「言ってることがさっぱり解らない」
「解らなくて結構。どっちみち隕石を掘り出すためにも、この学校はいずれカラッポになってもらう。どうせならその前に将来我が社のテクノロジーの一端を担(にな)うこの技術を実験させてもらったって罰はあたらないだろう。この世の中、金持ってるやつが一番偉いんだよ。そういうもんさ。政治家だって金金金だろ。堕落したもんさ」

「思い通りにはさせない」
光輝がまた笑う。本当におかしくてしょうがないらしい。
「まったく、君は真面目だよね。本当に君ひとりで僕達に立ち向かえるとでも思ってるのかい。それにしても驚いたね。小学生の癖に政府の特務捜査官だったなんてね。君がこの学校に転校してきた日、どうも普通の小学生には見えなかったんでちょっとさぐりを入れてみたんだけど、君のお父さんが政府お抱えの武道の師範をやっていることくらいしか解らなかった。昨日、健太郎から君の正体を聞いて驚いた。僕としたことがしくじっちゃったよ。結果的に僕の正体をさらけ出すことになっちゃったね。まあもうすぐ死んでもらうんだから関係ないけどさ」
「芳井はなんで殺すのだ」
「こいつは余計なことをした罰さ。つい数日前に気づいたんだ。たまたま女子の会話を耳にしてね。こいつのせいで、空中幻想固定装置の発信器がクラスから半分に減らされてたんだよ。君は転校生だから知らないだろうけど」
――まさか、こいつ。
「さあ、早く助けに行ってやれよ。こんなセクハラ教師でも、一応日本国民のひとりだ。君には助ける義務があるんだろ？」
まだ光輝は芳井がCSCUのエージェントだということを知らないのか。
「ああそうそう。行く前にひとつ、伝言があるよ。君の友達だった子から」
「友達」
翔子は光輝が何を言おうとしているのか解らなかった。自分は今まで友達と呼べるようなものを持ったことがない。
「美佐子さんだよ。仲良さそうにしてただろ」
「美佐子……」
「これ、みんなには聞こえてなかったんだけど、美佐子さんが僕の腕の中で死ぬ時、最期に言った言葉があるんだ。『翔子ちゃん、ごめんね。お料理失敗しちゃった』だってさ。――笑っちゃうよねえ。口から血を吐きながらさあ。塩と砂糖を間違えたとでも思ったのかな」
そう言って光輝は笑った。
今までで一番おかしそうに、笑った。
腹をかかえて、笑っていた。

翔子の頭の中で何かが切れた。
「……許さない」
そうささやくような声で呟く。
「はあ。――今、なにか言った、君？」
「わたしはお前を許さない」
光輝はまゆを片方つりあげ、おどけた笑顔で翔子を見ている。
「宿命とともに生まれ、宿命とともに生きてきたわたしにとって、人生、まだわけのわからないことがたくさんある。友達などというものも持ったことはないし、そんなものを持つ意味もわからない」
翔子はジャンスカのポケットから輪ゴムをとりだすと、髪の毛をうしろにたばねた。そしてひとりごとのように続ける。
「ただなんとなく、美佐子の気持ちのようなものはわたしに響いたし、今まで何十人もの死をみつめてきたわたしでも、彼女の死は胸がしめつけられるようなものを感じた。でもそれらが何なのかは解らない。わたしはまだ小学生、これからの人生で学んでゆくものなのかもしれないし、わからないままかもしれない」
なにを言っているのだ、とでも言いたげな顔で、光輝は聞いている。
「ただひとつだけはっきり言えるのは」
翔子はきっと光輝を睨んで言った。「――お前のような血も涙もない悪人を、わたしはこれからも憎み、戦いつづけるといことだけだ」
翔子はランドセルを背中からはずして、ＣＳＣＵのロゴを光輝に示した。
「天が許しても、人が見逃しても、地がお前を匿(かくま)っても、わたしだけはお前を許さない。生まれながらに背負った宿命と、失ったすべての尊い命にかけて、この湖姫翔子はお前の未来を闇に葬るだろう」
そう叫ぶと、翔子はランドセルを光輝に投げ付けた。光輝はポケットに手をつっこんだまま、手に持っていた黄色い旗でランドセルを正面にはじきとばす。ランドセルは高く舞い上がり、光輝は旗を口にくわえ、ポケットから手を出し両手を左右に広げて指をほぐすようにくねくねと動かした。翔子は腰を低め、ランドセルがふたりの中央に落ちると同時に地面を蹴り上げ、光輝に襲いかかる。襲いかかる最中(さなか)に素早くランドセルの角から金属製の定規を抜き出し光輝の脳天めがけて振り下ろした。

「瞬(はや)っ！」
光輝の身体が瞬時に右へとはじき飛ぶ。そのまま地面をころがり泥だらけになって中腰に落ち着いた。
額からひとすじ、血が垂れる。
「すごいね、やっぱり。君って」
光輝は口にくわえた旗を手にとり、剣のようにかまえた。その声は寸前に味わったスリルと興奮にふるえている。「僕も空手と剣道じゃ小学校の全国大会で優勝したほどの腕前なんだけ……」
風を切る音がして、もう翔子が目の前にいた。定規が左上から袈裟掛けに振り下ろされる。
「ひょおぅ！」
光輝が旗で定規を受け、パタパタと左右上下に動かしながら翔子の視界を撹乱(かくらん)する。そのまま旗の穂先を前に突き出す。前方にはいつのまにか森が広がり、小さなものが背後に着地する音が聞こえた。振りむきざまに旗を水平にふりまわすと、かつんと音がして旗と定規がかち合い、手首にすごい衝撃がはしった。
続けざまにくり出される定規の攻撃を光輝は旗でうけては後ろにさがる。背中に木があたり、旗をふって定規の先に布をからめ脚蹴りを喰らわせた。翔子は定規と旗の接点を軸に扇のように旋回しこれを避け、光輝の頭上の木を蹴りからみついた旗を切り離し、着地と同時に定規で木をまっぷたつに切り倒した。
木が地面をたたく音に、ヘリコプターの音がかさなり合う。
見上げると、ヘリコプターからたれ下がる縄梯子から光輝がぶらさがっていた。肩で息をつき、翔子を見下ろしている。ブレザーの腹のあたりが切り裂かれ、足もとからは血がつたっていた。
「――ダメだダメだ。ちょっと遊ぼうと思ったんだけど、そんなレベルじゃなかったよ。あはは」
翔子も縄梯子に飛びうつる。
「翔子さん、ダメだよ。芳井先生を助けなくていいのかい」
光輝はどんどん登ってゆく。翔子は縄梯子の一番下から光輝を見上げ、校舎を振り返り、地面を見下ろしまた光輝を見た。

「くっ」
翔子は一瞬考え、地面に飛び下りた。生きている限りいくらでも光輝をしとめるチャンスはあるが、一度死んだ人間は生き返らない。
翔子は定規を握りしめると、風のようなスピードで校舎へと走り去った。

校舎の中に土足のまま突入すると、翔子は四年三組の教室へと走った。
すでに空中幻想固定装置のスイッチは入っている頃だ。
ふと、階段のむこうに気配を感じた。人間だ。それも大勢。
翔子は立ち止まり、目を閉じ頭から雑念をとりはらう。中国拳法奥義・炎神拳の修行により、翔子は精神を無の境地に同化させることができる。空中幻想固定装置の波動には決して惑わされない自信があった。
ただ、あの男には無理だろう。
階上から無数の子供の声が聞こえてくる。今日は日曜日。聞こえてくるはずのない声だった。
まさか。
翔子はさらに精神を統一し、感覚をとぎすませた。とぎすまされた感覚は、心の眼を解放し、隠された虚像を知覚する。
子供たちの声が近づいてくる。
手にした定規をふる。しゃっと音がして、定規の長さが一メートル半ほどに伸びた。そしてそれをかまえなおす。
子供たちの声が目の前まで迫ってきた。
翔子は目を開ける。
そして、見た。
常人には見えないが、翔子の心眼(しんがん)にははっきりと捉えられた。
それは視界をおおうような、無数の幼女たちの群れだった。
「――よ、芳井、お前は！」
現れた〝敵〟を前にして、翔子は全身の力が抜けてゆくのを感じた。

8　小さな殺人者たち

それは翔子にとって、何と表現していいのかわからない狂った光景だった。あとからあとから階上よりわいて出る、幼女たち。さまざまなコスチュームに身を飾っているかと思えば、裸の子もいる。背中に羽が生えているのもいる。フリルのドレスを着ているのもいれば、看護婦の服装、学校の制服、スクール水着、下着、バニーガール、チャイナ服、メイド、ゴスロリもいる。もちろん翔子には〝ゴスロリ〟などという呼び方は知らなかったが。

それらの幼女たちが次々に群がってきては、手当りしだいに翔子の胴や脚に噛みついたり引っ掻いたりするのだ。翔子はそれを定規でなぎはらっていった。

あまりのメルヘンチックな光景に一時は脱力しかけた翔子だったが、こまごまとした攻撃を受けるにつけ、気を引き締めた。手加減してはいられない。武力の限りを尽くして定規を振り回す。定規の尖った面は刃物のように鋭利になっており、刀のような役割も果たす。一見ふつうの定規に見えるが、その実、ＣＳＣＵが開発した武器だった。

美少女たちが次々に血を噴き出して倒れてゆく。刀のひと振りごとに、頭骨を砕き、眼球をえぐり、首をへし折り、はらわたを突き刺し、手足をたたき落とす。

これらの異様な幼女たちは、芳井の頭が作り上げた幻想といっても、完全に実体化していた。しかも倒しても倒しても、あとからあとからやって来る。翔子の電光石火の動きでも、階段を数秒に一歩ほどくらいしか進めない。

この分では、芳井の命は今頃――。

発生した幻想は、それを作り出した者を中心に殺傷してゆくという。ならばその発生源である芳井はすでに、この幼女たちの餌食になっているのではあるまいか。

翔子は定規を振り回しつつ、幼女の肩に飛び上がり、階段の手すりを走り、着地しては、目の前の幼女たちを斬り殺す。そしてまた飛び上がっては前へと進んだ。全員を確実に殺しながら進むのは無理だった。

ふいに、さあっと霧のような水滴が降り注いだ。
見上げると、天使のように羽の生えた裸の幼女がその小さな割れ目から、小水をまき散らして飛んでいる。
爆撃投下だ。
「くっ」
翔子は顔を赤らめ、定規を天使に向かって突き上げた。定規の先が天使の無垢な割れ目に突き刺さり、振りおろされる定規とともに、床に叩きつけられる。天使は股間からおびただしい血を吹き出し、階段を転がり落ちてゆく。
うふふふ。
あはははは。
くすくすくす。
美少女たちの笑い声がこだまする。笑いながら、襲ってくる。たまに噛みつかれたり引っかかれたりするのと、殺した美少女たちの返り血で、翔子の洋服は細かくほつれ、破られ、ところどころ血がにじんでいた。また激しい攻防に、汗は額にからみつき、肩で激しく息をつぎ、定規のひとふりごとに、喉からかき出されるような声が漏れる。
ようやく四階までやってきた。あとは直線である。
その時だった。
ふいに、幼女たちの群れが両側に開いたかと思うと、そこに五人の色違いの似たような服装をした美少女たちが現れた。
女学生の制服のようだが、それにしては派手である。
うふふふ。
あはははは。
くすくすくす。
周囲の幼女たちが楽しそうに笑いながら、五人の少女たちと翔子を交互に見ていた。あたかもこれから始まる戦いに胸を踊らせているかのようだ。
翔子は定規を構えなおし、五人の少女たちを観察する。
これまで斬りすててきた幼女たちとくらべて、若干ではあるが、この五人は戦闘能力を保持しているように思えた。
しばらくにらみ合いが続いたのち、左端の水色の制服を着た少女がとつぜん宙を舞った。ひと呼吸遅れて、その隣の赤い制服の少女も突進する。

水色の少女が空中に浮かび、その動きが水の中を泳ぐようななめらかな曲線を描いたかと思うと、次の瞬間つきだされたその両手から、洪水のような水が噴射される。

翔子はびしょぬれになりながらも地に根をはり水圧をしのぐ。

さらにたたみかけるように、赤色の少女の周囲に炎がゆらめき、それが炎の砲丸となって、打ち出された。

水びたしになった翔子の全身は一瞬にして干上がり、長い髪の毛のすそがちりちりと焦げ臭い音をたてる。

それでもなんとか直撃をかわし、翔子は五人に向かって走り出す。

走りながら、敵の攻撃を分析する。

水と火。

すると、五人の少女はそれぞれ五行の力をつかさどる戦闘能力の持ち主に違いない。ならば、右の緑色の服を着た少女は木、その右の黄色の少女が金。中央が土。あるいは中央と黄色は逆の可能性もある。どちらにしろ、ひとりを倒せば、五行相生(そうじょう)のバランスは崩れ、あとはもろい。

木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず。これを五行相生という。

攻撃は最初に水、そして火の順だった。恐らく次の攻撃は金、そして木、最後は土の攻撃となるだろう。ならば、この連鎖を断ち切るための戦法は。

翔子は迷わず一番右の黄色の少女に向かって突進していった。

敵の最初の攻撃を見極め、次の瞬間で攻撃に転ずる。そして確実にしとめる。これは生まれた時から戦闘の極限を学んできた翔子の必勝の法則だった。

黄色の少女は一直線に自分に向かってくる翔子を見て、驚いたように両手を口にあてた。

本当に怖がっているようにみえるが、フェイントに違いない。その証拠に、他の四人は助けようとせずやはり驚いたように立ちすくんでいる。

翔子は五人それぞれが一瞬で攻撃できると思われる射程距離の寸前で、まったく違う方向にジャンプし、定規を黄色い少女に向かってブーメランのように投げた。

そのまま一番左の水色の少女に脚を打ちこむ。

黄色の少女の首が宙を舞った。

その周囲に輝きはじめた黄色い光がしぼんでゆく。攻撃をしようとしていたようだが、翔子の動きが数倍まさっていたのだ。
黄色の少女の首から血が噴き出すと同時に、翔子の脚が水色の少女の顔面にめりこんだ。
そのまま床をころがり、後ろに落ちた定規を拾う。
残るは三人。
緑色の少女の頭上で雷が光り、それを頭上に突き出たアンテナのようなものに受け、両手から翔子にむかって放射した。
翔子は定規でそれを受けとめる。
電流と定規がクラッシュするや、とびちる閃光に一瞬だけ目がくらむ。
両腕のしびれる感覚をこらえつつ、翔子は緑色の少女に向かって突進した。
電流の攻撃が途切れた一瞬に、翔子の定規が緑色の少女を袈裟掛けに斬りすてた。そのまま返す刀で中央の少女に定規を振り上げるが、少女は手に持っていた杖のようなものでこれを受け、後ろに飛びさがる。
休むことなく翔子は定規をその右に立っていた赤い少女に斬りつけた。
続けて二度三度と振りまわす。
赤い少女の右腕がおち、左腕が落ち、そして定規はみぞおちをつらぬき、その身体のあちこちから炎のように真っ赤な血を噴き出して倒れた。
「ヨクモ」
ひとり残った少女がしゃべる。
「ワタシノトモダチヲ、コロシタワネ」
翔子は定規にぬめりついた少女の血をふりしぼると、その切っ先をひとり残されたリーダー格と思われる少女に狙いさだめた。
「ツキニカワッテ」
といいながら、少女は両手を奇妙な形に交差させ、独特の構えを形づくり、
「……オシオキヨ」
と言った。
翔子はその奇妙な構えを観察した。
拳法の構えのようにも見えるが、この形がどんな動きに転ずるものか予想ができない。手に持った杖のようなものも、武器にしてはあまり有効な形には思えなかった。恐らくなんらかの術をかもしだす道具なのではあるまいか。

それにしてもこの少女たち、最初は手強そうに思えたが、所詮、もとは芳井の幻想だからか、倒した四人は意外ともろかった。

四人がもろかった理由はタキシードを着た人物が芳井の幻想に含まれていなかったからだが、もちろん生まれてこの方テレビなど見たことのない翔子にそんなことがわかるはずもなかった。

ひとり残った少女が宙に浮かび、手に持った杖を大きく、まるく、動かした。

とつぜん、周囲の空間が異次元のような広がりをみせ、翔子の目がくらむ。

「やあっ！」

次の瞬間、翔子の定規が少女戦士の胸をつらぬいた。

少女の動きが止まり、糸の切れた操り人形のように床にたおれふす。周囲にもとの学校の廊下の光景がよみがえった。

翔子の一瞬の判断の勝利だった。

四人の少女がもろかったのは、最後に必ず敵を倒せる戦法を中央の少女がにぎっていたからに違いない。そう考えた翔子は、少女が杖をまわしだした瞬間、ほぼ無意識に定規を少女の心臓めがけて投げていた。

少女はまだ息があり、床をはい落とした杖に手をのばさんとしている。

翔子の身体が宙で大きく弧を描き、その膝で少女の背骨をくだいた。つづけて落ちた定規を後ろ手にひろうと、その首の後ろにばさりと振りおろし、とどめをさした。

ゆっくり立ち上がりながら、周囲を見渡す。四年三組の教室は目の前だ。

翔子は静まりかえった周囲の幼女たちをじりじりと定規で威嚇（いかく）しながら、四年三組の扉を開けた。

9　死闘の果て

四年三組はまさに幼女地獄ともいうべき有り様だった。教室の中いちめんに、弁当箱のように幼女がぎっしりつまっている。

「芳井！」

翔子は芳井の姿をみつけそう叫ぶと、行く手をはばむ幼女たちを雑草のように斬りすてながら、近寄っていった。

芳井は幼女地獄の中央で、ふぬけたように笑っている。見ると、その周囲からまだなおも無数の幼女たちの幻想が実体化していった。
芳井がいまだ殺傷されることなくこれまで生きていられたのは、切れ目なく幼女を生み続けていたからであった。おかげで翔子はおびただしい量の幼女たちを肉塊に還元しながらここまで進んできたわけだが。
「しっかりしろ」
翔子は芳井の頬をたたき、その弛緩しきった目に精気をもどさせる。
芳井の両目が翔子をとらえ、幼女の増加がとまる。
うふふふふ。
あはははは。
翔子はいっせいに襲いかかってきた周囲の幼女たちを斬りすてながら、
「芳井、逃げるぞ！」
と叫んだ。
「ああ、ああ、ああ、あ……ミホちゃんが」
と芳井はうわごとのようにしゃべる。
「サツキちゃんが、メイちゃんが、シータちゃんが、キキちゃんが、チヒロちゃんが、ラナちゃんが、チズコちゃんが、ミカちゃんが、チセちゃんが、ツカサちゃんが、マユミちゃんが、ユウキちゃんが、マユちゃんが、ノリコちゃんが、サユリちゃんが……ああ……みんな死んでゆく」
「芳井！」
翔子は十分ほどかけて教室内の幼女たちをすべて殺すと、これ以上幼女たちが入ってこないように、教室の扉をぴしゃりと閉め、近くの椅子で取っ手を固定した。
すでに翔子の全身はバケツの血をあびたように真っ赤だった。ただし、心眼で幼女たちの幻想をとらえている翔子とその幻想を生み出している芳井本人以外は、ただボロボロの洋服を着ている少女にしか見えない。
もう一度芳井の頬を何度もたたく。
「まだねぼけてるのか」
芳井はきっと翔子をにらむと、
「翔子ちゃん、ひどいじゃないですか。私のかわいいミホちゃんたちを殺すなんて」

とふてくされる。
「なにを言っている。これは光輝の罠だ」
「だいたいですね、私は翔子ちゃんみたいな子供らしくない女の子はキライなんですよ。前から言いたかったんですけど」
「な、なにを」
「翔子ちゃんは小学生でしょう。もっと子供らしくしなさいよ。私は子供が好きだからこの仕事を選んだんですよ。それなのに君みたいな子供の腐ったみたいな女の子と組まされた私の苦労も考えてくださいよ」
子供の腐ったのとはどういう意味だ。
「わたしの方がよっぽど苦労している！」
芳井ははたして正気なのか冗談なのか狂っているのか。
「とにかくここを脱出するぞ」
「翔子ちゃんひとりで行ってください。私はここでミホちゃんたちと遊んでいたいんです」
そう言って芳井はふらふらとドアに向かって歩きだす。
「バカな、殺されるぞ」
翔子は芳井の襟首をつかんで引きずりたおす。
「私はここにいたいんです！」
芳井は腕をくんで、床にあぐらをかいたまま座りこんだ。
「芳井！」
翔子は定規をふりあげる。
「殺すぞ」
使命を怠った者には死、あるのみ。そう教えられてきた。
芳井は動じない。
「本当に殺すぞ」
廊下のむこうでは、小さな手が扉をたたく音と、きゃっきゃっと笑う幼女たちの声が聞こえている。
「貴様は任務をなんだと思っているのだ」
翔子の高々と定規を振りかぶるその手がぶるぶる震えた。
「じゃあわかりました」
芳井が口を開いた。

「――翔子ちゃんがこれからは子供らしく、可愛らしい女の子になります、って約束してくれたら、私は一緒に行きますよ」
ばさり、と翔子の定規が振りおろされた。
どさり、と芳井の上半身が床にたおれた。
幼女たちの声がやみ、静寂がおとずれた。

10　呪われた親子

成田空港。
第一ターミナル四階の中華料理店で、ひとりの大柄な紳士とひとりの品の良い子供がフカヒレ姿そばをすすっていた。
「お父さん、いつ食べてもここのフカヒレそばは美味しいですね」
子供の方が箸でフカヒレの固まりをばらしながら言った。
「ああ。ここのフカヒレそばを食わないと、飛行機に乗る気にならんよ。さっきトイレでシンセミアを一発キメてきたから、よけいうまく感じるな」
「お父さん、大丈夫なんですか、こんなところで」
子供は口のまわりを油で光らせながら笑った。
「大丈夫だよ。私には強力なバックがついているんだ。それにせっかくいいシンセミアが手に入ったんだ。ここで使わなきゃもったいないだろう。鹿野もよくやったよ。あいつが数年前うちの裏事業の貿易ルートをしっかり統制してくれたおかげで、いい品が入るようになった。あいつも今では副社長だ。いい右腕だよ」
そう言って紳士はかかかと笑った。
「鹿野さんには僕も何かと目をかけてもらってて」
そう言って光輝はナプキンで唇の油を拭く。
「それより光輝、学校の方は大丈夫なんだろうな」
「ええもちろん。さっきはちょっと危ない目にあいましたが、幸いかすり傷と新品のブレザーを台無しにするだけでことなきをえました。いまごろはあの小娘、ロリコン教師の妄想の下敷きになって、魂をお天道様に捧げている頃ですよ。万が一助かったとしても、証拠はすべて爆破しておきました

し。空中幻想固定装置のスイッチも本当はあの木の穴のなかに入ってたんですよ。あとは教室の笛だけですが、あれは単純な放射口だけですしね。そこいらの機械に詳しい大学生でも作れるレベルのものですから」

「そうかそうか。抜け目のないところはさすが私の息子だな。いや、それにしてもお前としたことが、情けない。お前は将来、私の後を継いで世界を征服する人間だぞ。学校のひとつやふたつ、手中に納められないでどうする」

「ごめんなさい。お父さん。邪魔が入らなきゃもう少しだったんですけど」

光輝はそばの湯気で汗ばんだ額をかいた。

「まあ、今回の件はお前もいい経験になっただろう。ここらへんでアメリカに留学して再度、帝王学を学びなおすのも大事なことだ」

「悪の帝王学、ですね」

そう言って光輝は笑った。父も笑う。

「あの国は大統領からしてああだからな。お前の将来にとってもいい肥やしになるんじゃないのか」

光輝が箸を置いた。

「……お父さん、ちょっとトイレに行ってきます」

「食事中にか。行儀が悪いぞ」

「いやだなあ、お父さん。僕もあれをキメにいくんですよ。お父さん、あまりにも美味しそうに食べるんだもん」

「わはははは、そうかそうか。さすが私の息子だの」

光輝は父からシガレットケースを受け取ると、トイレにむかった。

個室に入り、シガレットケースから紙に巻かれたシンセミアをとりだすと、口にくわえ百円ライターで火をつけた。

煙を肺にため、フーッとふきだす。

頭がクラクラと回りはじめる。同時に胃袋からのどにかけて心地よい食欲がわいてくる。

さらに二度三度とシンセミアを吸いながら、光輝は学校のことを考えた。

あの小娘はちゃんと死んだだろうか。四年三組にあれだけの笛の数と、あれほどの下劣な想像力の持ち主を一緒にしておいたのだ。さぞやすさまじい幻想が実体化したことだろう。そんなところに小娘ひとり、いくら武術の達人だからとはいえ、しょせんまだ小学生である。とても生きて出られるとは

思えない。例え生きているとしても、証拠はすべて爆破した。万が一やつが助かっても、その頃にはどうせ自分は空の上だ。あとは父が右腕の鹿野に手を回していい案配(あんばい)に仕上げてくれる。

光輝はにやりと笑いながら、シンセミアの吸い殻をトイレに流した。

個室のドアを開ける。

おや。

ドアの前に、ひとりの少女が立っていた。

髪ふりみだれ、ところどころ血がにじみボロボロになった服を着て、その手には定規がにぎられている。

「……おい、ここは」

光輝は眠そうな目で言った。「男子トイレだよ」

なにを自分は言っているのだろう。今、目の前にいるこの少女が誰かってことくらい、わかっているくせに。

「ははっ」

光輝はとたんにおかしくなり、腹をかかえて笑いだした。

「あはははははははははははははははははははは！」

「天誅！」

そのかけ声とともに、光輝の身体はまっぷたつにちぎれ飛んだ。

その頃すでに、成田空港第一ターミナル四階の中華料理店では、ひとりの紳士がフカヒレそばに顔をうずめ、死んでいた。

エピローグ

携帯が鳴る。

ターミナルを歩きながら、翔子は受話器を耳にあてる。

「もしもし」

「ああ、翔子ちゃんですか。今しがた気がついたんですけど、ここはどこなんでしょう？」

「そこは恐らく病院だ。携帯は禁止だぞ」

「病院？」
しばらく沈黙があって、
「どうして――私が病院に？」
と聞いた。
「わたしがお前を一時的に仮死状態にしたのだ。本当は殺そうと思ったのだが、寸前で気の迷いがあった」
「殺す？　私を？　翔子ちゃんが？　どうしてまた？」
「お前、覚えてないのか」
「はあ」
本当に覚えてないらしい。
しかし事件は無事に解決した。空中幻想固定装置によって実体化した幻想は、それを作り出した本人が死ぬか仮死状態になることによって、消滅するらしい。お陰で翔子は早く成城南小学校を脱出することができ、光輝が飛行機に乗る前にしとめることができた。
光輝があの後、海外に逃亡するつもりだということは容易に想像がついた。任務で何度か海外にでたことのある翔子は、ヘリコプターの方向から成田空港に目星を付け、すぐに向かったのである。
「で、事件は？」
まだねぼけた声で、芳井が聞く。
「黒崎親子は始末した。後片づけはＣＳＣＵに直接連絡をとって頼んでおいた。お前はゆっくり寝ていろ」
「はあ。それはそれは」
「では。切るぞ」
「いやあ、翔子ちゃん、今回もお手柄でしたねえ。さすがさすが」
「切るぞ。いいな」
「そうだ、翔子ちゃん。さっき目が覚めたとき思いついたんですけど、私、翔子ちゃんのコードネームを考えましたよ」
「なんだ」
「〝ロリコップ〟ってのどうです。いいでしょう。翔子ちゃん、子供らしくないんだから、せめて名前くらいは可愛くいきましょうよ」
「芳井」

やはりさっき殺しておくべきだったか。
「決めゼリフなんかも考えなくちゃいけませんね。先代の女の子たちはあったんですよ。うちがCSCUとして独立する前、まだ内閣機密調査室の一部だったころの話しですが。あの頃は高校生だけでしたがね。今度指令と相談しておきますよ」
「興味ない」
翔子は携帯を切った。

成田空港第一ターミナル入口から出てくる少女を、ひとりの男が車のなかからじっと見詰めていた。少女の洋服はところどころ破れ血がにじんでいる。
男は少女から目をはなさずに、携帯の番号をまわした。
「もしもし。鹿野だ」
「あ……はい。ふ、副社長ですか」
「もう副社長じゃない。今日からは社長だ」
男は煙草に火をつけた。
「えっ……あ……はあ、しゃ、社長。あの……えっ、黒崎……社長は……」
「死んだよ。しらじらしいな。君たちが協力してくれたからじゃないか。で、健太郎くんは？」
「あ……はは、……はい。さっき……帰ってきまして」
「それはよかった。まあ政府の人間を駒のひとつとして使うというのも危険な賭けだったが、君の息子さんのお陰でうまくいったよ。私の事業部が開発した空中幻想固定装置を社長親子に使わせるようまく誘導してくれたし、またその計画が頓挫するよう、いい具合に情報をリークしてくれた」
男は満足そうに煙をはきだす。
車の外では、さっきの少女がサングラスをかけた俳優の長門裕之似の初老の男と車に乗り込み、去ってゆくのが見えた。
「黒崎前社長には気の毒だったが、仕方がなかったんだ。あの人は我が社の代表として実力もカリスマ性も申し分なかったが、ちょっと自分の快楽に浸りすぎるきらいがあった。私が手を回さなくても、こうなるのは時間の問題だったと思うよ」

男は煙草をもみ消し、車のエンジンをかける。
「おめでとう。来月正式に発表があるが、君には課長の椅子を用意してあるよ。ああ、健太郎くんの転校先もちゃんと手配してある。なにも心配することはない。それじゃ、明日会社で」
男は携帯を切り、車をスタートさせた。
明日から忙しくなるな……。
鹿野昭太郎は前を走る黒い車を眺めながら、ふっと微笑んだ。

（了）

参考・引用文献

『要人を守れ！―プロ・ボディーガードの驚異の世界！』
清水伯鳳著（近代映画社）

『パワーストーン百科全書』
八川シズエ著（中央アート出版）

その他、この小説を読めば明らかなもの多数。